

「翻訳の可能性と不可能性」²

村上 陽一郎（国際基督教大学大学院教授、東京大学名誉教授）

今日の私のタイトルは「翻訳の可能性と不可能性」ということにしました。

「ニュートンは理学博士が取れなかった」

日本を代表する最高峰の学者たちの集まりである、ある組織の責任者をしていらっしゃる方がある時こういう発言をしております。「ニュートンというのは学校秀才ではなかった」 まあよくある話ですね。諸々の世界で最も尊敬されるような人たちが必ずしも学校時代に良い成績を上げていなかったという話はそれ自体別段珍しい話ではないですし、ままあることもあります。ただこの方が続けてこうおっしゃったんですね。「それが証拠にはニュートンは理学博士が取れなかった。だから哲学部にいたんだ」

これは非常に奇妙な話なんですね。ニュートンが生きていたのは1642年から1727年まで、活躍したのは17世紀後半でした。さて、その頃のヨーロッパの大学に理学部はあったでしょうか。もちろんないですね。理学博士なんて存在しないです。理学部という概念は今日の私たちの考え方の枠組みの中で存在し得るものであります。17世紀や18世紀のヨーロッパの概念でそういうものが存在したはずがない。ところがこういうふうに思い込んでしまうという歴史に対する考え方が今から50年近く前にようやく崩れ始めました。

ウィッグ史観について

先ほど米原さんがグローバリゼーションというのは自分の持っている枠組みを世界的に広げていくことだとおっしゃったのですが、それと全く同じ考え方、つまり、ヨーロッパの近代というものをあらゆる場面に押し広げて行くことが歴史のグローバリゼーションで、これを歴史の世界ではウィッグ史観というふうに申します。イギリスにもアメリカにもウィッグ党というのがありましたけれどもそのウィッグの取った歴史観のことです。



このウィッグ史観というのは結局のところ近代というものを絶対的なものだと考えて、それを実は地域の上でも、シンクロニック（共時的）に存在している様々な世界に向かって押し広げていこうとする、これが現在私たちが直面しているグローバリゼーションの一つの姿だと思います。これを今度はディアクロニック（経時的）に、つまり時間を違えてその違った時間にも近代の考え方や近代の枠組みを適用してしまう、そうしますと過去というのは実は近代の極めて貧しい姿なのということになります。近代が実現してきたものが100パーセント実現されていない、つまり過去というのは近代の非常に貧しい雛型であるという歴史観ですね。実は歴史に関するこのような考え方は拭おうと思ってもなかなか拭えない、大変難しいんです、ここから脱却することが。私たちは今でも、色々なとこ

² この講演記録は『東京外語会会報』No. 104, 2005年6月1日発行, pp. 19-22に掲載されました。ここでは東京外語会の許可を得て転載しています。

ろで残滓、残りかすを身につけております。

ヨーロッパでは18世紀啓蒙主義以降の世界でこういう考え方の下に歴史の上でもまたシンクロニックにも、他のシンクロニックに存在している様々な部分に対する評価をします。この際にヨーロッパ近代が成し遂げて達成したというものを尺度として、他の同時に存在している様々な文化、ああまだここはそれほどそれが達成されていない、非常に遅れた文化だ、あるいはこれはなるほど少しはいいぞ、我々が達成したものにこれくらい近づいているではないか、というような形で評価をするのです。これが実はシンクロニックに存在している文化に対する考え方として18世紀、19世紀、20世紀の今でも続いており、例えば、“developing countries”、現在発展途上中の国々、のゴールはどこかという、それこそ先ほどのサミットではありませんけれども、ヨーロッパ先進国が達成した高みに向かって自らを発展させていくという言い方をするわけですね。つまりそこにすべての人類が向かって発展しなければならないという命題が見え隠れする、そういう考え方が私たちの中に、そして私自身の中にもあります。全部を拭い去るのは大変難しいということなんですね。それが100パーセント全面的に間違っているかということこれはまた一つの大問題ですが。

歴史の文化人類学化

ここでお話ししたいのはウイッグ史観から脱却した一つの学問分野があったわけですね。19世紀の後半近くから20世紀初頭にかけて、そのあたりから始まった文化人類学の新しい波の中で文化の等価性、つまりすべての文化は等しい価値を持っているという考え方、が生まれてまいりました。少なくとも文化人類学に関してはそういう方向性がきちんと打ち出されたわけですね。私は歴史もまた同じことだと思っております、時々それを歴史の文化人類学化というような言葉で表現することがあります。実は私は、私たちの過去、歴史的な過去というのはある意味では異文化だと思うのです。だから過去を理解しようとするのはちょうどシンクロニックに存在している異文化を理解することと同じ手続きと同じ英断とか感性とかが必要になる、というふうに私は考えます。歴史学というのはまさにそういうものなのです。今私たちがパプアニューギニアの人たちの生活を理解しようとするときパプアニューギニアの生活空間というものを出来る限り知ろうとする、文化人類学者はそうですね。ここではまだ文明的に遅れている、こんなことをしている、こんなこともできていない、だからこれは非常に遅れた文化なんだという判断、そういう裁断はしてはならないというのが、今の文化人類学者の基本的なスタンスです。その意味では歴史もまた全く同じことだということができるように思います。

人々はある時代に通用している言葉によって張られている意味の空間のようなものの中で生きていくわけですね。ですから、例えば、一番ポピュラーな言語である英語に“science”という言葉がありますね。この言葉をシェークスピアが使っている場面がありますけれどもそれを「科学」と訳したら私は誤訳、明白な誤訳だと思っています。なぜかという16世紀、17世紀、18世紀の英語の中で、その時代のその言葉は知識ではあっても現在の自然科学を意味する「科学」と訳したのではこれは明白に当時の意味空間を表現していない、現在の意味空間で過去を裁断しているのと同じことになる、と私は思います。

『解体新書』における翻訳・義訳・直訳

『解体新書』の最初にある翻訳論の中で杉田玄白は翻訳に三つの意味あるいは三つの形がある、翻

訳と義訳と直訳である、というふうに表示しています。例えば骨、オランダ語の中で骨に相当する言葉と日本語の中での骨はまさに、ほとんど一対一で対応している、だったら、それを置き換えるということで「翻訳」が成り立つのではないかというわけです。その次に、文字通り、意味を取って訳す意識、玄白自身の言葉では「義訳」というのを非常に多用いたします。例えば、軟らかい骨を意味するオランダ語がある、これを日本語に訳すときは「軟らかい」というのと「骨」というのを取って新しく「軟骨」という言葉を作ったわけですね。そういうふうにして玄白は非常に多くの、現代でも医学の世界で使われている神経、十二指腸など様々な言葉を作りました。それから「直訳」。彼の言う直訳は実は当て字のことなんです。例えば、「キリイル」というオランダ語が出てまいります、この「キリイル」が彼には訳せなかった、意味が取れなくて義訳ができなかったんです。それから翻訳、それに相当する言葉も日本語にはない。そこでしょうがないから、「キリイル」という言葉をそのまま音訳して「機」という字と「里」という字と「爾」[なんじ(汝・爾)の爾で「ル」と読みます]、という字を当てて、「機里爾」という言葉を作りました。

さて、この翻訳の中では彼は非常に多くの義訳をやっています。例えば、英語の“nerve”に相当する言葉を「神経」という新しい二字熟語を作って対応させたわけですね。なぜ彼はこういう多くの義訳をやって新語を作り出していったのかというと、明確に主張してはいませんが、彼の翻訳についてのコメントから推測される一つの彼流の主張が浮かび上がってまいります。ヨーロッパの生理学の中で「神経」という概念が占めているのにちょうど一対一で対応するような言葉は、漢方医学の中での「経絡」がかなり近い。にもかかわらず、玄白は「経絡」を選ばずに心が通っていく道を意味する「神経」という新しい言葉をあえて作り出して対応させました。

別宮貞徳先生の翻訳論

別宮先生の翻訳論というのは、日本語としておかしかったらそれは翻訳としては無価値である、ということです。それはまさにその通りですね。だから徹底していわば「日本語化」してみる。意味のある翻訳とは日本語としての意味がおかしくない翻訳のこと。哲学だけでなく、文学の翻訳でもそういう意味では翻訳に値しないものがたくさんあったと思います。ですから先生はそういう翻訳を誤訳、迷訳、欠陥翻訳として非常に鋭く弾劾されてきたわけですね。ああいう仕事は非常に大事な仕事で、日本の翻訳の質は先生のお蔭で少しは上がっているというふうに私は感じています。

ここで翻訳の世界でしばしば語られるエピソードを一つ。太宰治の作品の中に40代の男性の主人公が日常的に和服を着て、白足袋をはいているという描写があるわけですね。この白足袋をどのように英訳するか。“white socks”では噴飯ものになる。白いソックスを履いていた50年代のミーハー“bobby socker”がちらつくからです。私たち日本人には白足袋の描写からいくばくか過度の潔癖さ、いくばくか四角張ったところという感覚が伝わってまいります。有名な日本文学研究家はこれを“white gloves”という名訳にしました。迷訳ではありません。

文学の翻訳としてはそれ以上望むことはたぶんないのでありましょう。ないのでありましょうけれども、それで翻訳が100パーセント完結しているかといわれたときに、先ほどの玄白の話と重ね合わせてみますと、問題が残るのではないかと私は思っております。その方による太宰の英訳を読んだ、例えばアメリカ人あるいはイギリス人には日本人が白足袋として理解しているその「白足袋さ」、変な言い方ですけど、それは伝わらないですね。“white gloves”で伝わって、しかし「白足袋」は理解できない。白足袋というのは必ずしも今お話したような過度な潔癖さや過度な四角張りかただけを表現して

いるものではないわけですし、歌舞伎の囃し方やあるいは能役者が白足袋を履く、というような習慣の中にある白足袋の持つ意味というのは全く伝わらない。それはそれでいいのだというのは先ほど申し上げた別宮さんもおっしゃっているようです。私もそれ以上のことを望むのは少なくとも文学作品では間違いだということには100パーセント賛成いたします。しかし問題は残るだろうと思います。

「神経」という訳語の意義

玄白はなぜ「経絡」を使わなかったのか。ヨーロッパの生理学の概念が日本の漢方の概念に移し替えられて理解されることを防ごうとしたからです。そうだとすると、例えば、昔、黒岩涙香という人が行った翻案というようなやり方はどうなるのでしょうか。例えば、デュマの作品を訳していくときに彼は名前も日本語の名前、時代も日本の時代にして、つまり日本の文化、歴史の空間、意味空間の中に、そっくりそのままヨーロッパの話に移し替えて翻訳しました。でも何となくおかしいですね。『岩窟王』に出てくる「ダングラール」という名前の敵役を「段倉」と訳すわけですね。そういうふうにして移し替えたものが、どこかまだバタ臭いんですね、そのバタ臭さこそ実は大事なんだと私は申し上げたいのです。玄白はあえて「経絡」を使わずに「神経」という新しい言葉を作り、これを使うことによってとにかく自分たちが慣れ親しんでいる思考様式の中で理解してしまっただけでは、もしかすると大きな誤解を生み出すかもしれないという信号を出しているわけですね。彼が作った様々な新しい訳語が張る意味空間というのは漢方の中で使われている術語が張っている意味空間とは違う空間を示しているんだということを理解してもらい、そしてそれを理解するためには今までの漢方の意味空間の中にどっぷりつかっていたんではいけませんよという警告が実はその中に出てきている、というふうに考えることができるわけですね。そうするとですね、翻訳という概念が持っている非常に危うい話、つまり見事に日本語の概念、日本語の意味空間の中に移し替えられる「外外国」の話というのは、場合によってはその「外外国さ」というものを捉まえ損なう可能性があり得るということになるわけですね。通常の文学の翻訳という次元で考えればそれ以上望むことは多分出来ないのでしょう。

翻訳の不可能性

「根回し」という日本語にはまさに日本の社会の、その言葉を運用させるための意味空間がある。英語の“lobbying”の意味空間とは幾分重なる部分はあっても非常に違うところを持っている。そこで、その違うということを受け入れるためには、もはや「根回し」という言葉は、英語なら英語の辞書にエントリーして、それなりの解説を施して理解してもらいほかにない、と考えた辞書編纂者たちが、そういう日本語の中で、日本語の社会文化の意味空間を濃厚に背負っている言葉に関してはもはや翻訳をあきらめて、ちょうど、この場合は玄白の言う直訳、つまり、音訳と殆ど同じことをするので。

実はこのことはヨーロッパ語ですでに行ってきたことであります。例えばアラビア語。12世紀にヨーロッパがアラビアから学問・知識を学ぼうとしたときにアラビア語の中ですでに使われているターミノロジーに関してそれをそっくりラテン語ならラテン語に翻訳してしまうと意味が伝わらないのではないかと思ったときには、そっくりアラビア語の音をそのまま、例えば英語の音に直してそのまま受け入れた、というような実例がたくさんあります。英語の“algorithm”がまさにそうですね。元々「アル・フワーリズミー」というアラビア人の人名がそのまま“algorithm”という形になったのです。アラビア語をそっくりそのまま音訳したといえますか、英語などヨーロッパ語に直したという例は数限りな

くございます。

そうすると玄白がやったように、置き換える翻訳をして、例えば外国語を日本語に翻訳するとき、日本語の中に元の言葉に相当するベストと思われるものを探し当てることによって行われる翻訳というものには、最後の数パーセントというところで問題が残り得る、という意識を私たちは持つべきではないだろうか、それが翻訳の不可能性ということになってはね返ってくるのではないか、それはやむを得ないと思いますけれど、そこの余地を配慮し考慮するというを私たちは心掛ける必要があるのではないかと思うのです。

終わりに

翻訳に言寄せて最初の話に戻りますが、私は歴史を解釈するときにも異文化を理解しようとするときにも同じことが言えるんだということを自戒として申し上げておきたいんですね。歴史家も現在私たちが生きているこの時代、この現代という空間を過去に当てはめて過去を理解したり裁いたりすることはタブーであるというふうを考えるべきでありましょう。しかし果たしてそれがいったいどこまで可能なのか、どこから先は不可能なのかということを十分にわきまえつつその仕事をやっていかなければならないのではないか。それが過去の時代に向かい合うときの歴史家としての自分の基本的な姿勢として、そして、これはもしかしたら共時的に存在している異文化に向かい合うときにも同じようなことが言えるのではないかということを付け加えて自分の自戒ということを申し上げて最後の締めくくりとさせていただきます。